暮らしをひらく郷土研究マガジン

だいちのめ

8

2025 SPRING

SHIKOKU SEIYO GEOPARK

http://seiyo-geo.jp

“つくる”を続ける。

地域をふかぼりフィールドワーク「天然素材で絵の具をつくってみよう」

知の地層 「観察を通して考える：ネイチャージャーナリング」　ひろがる本棚　私のおすすめ

晩ごはんの献立や明日が〆切の仕事、地域行事の準備、子育てや介護…。
私たちは日々、いろんなことを抱えて暮らしています。
そうした目の前のことに向き合いながらも、ふっと視点をずらしてみたり、
時間のものさしをいつもより長く伸ばしたりして、日常を振り返ってみる
きっかけをつくりたい。
そんな想いから、『だいちのめ』を創刊しました。
なにか一つでも、ふだんの暮らしを考える問いが生まれますように。

『だいちのめ』編集部

<特集>

〝つくる〟を続ける。

02 “つくる”を続ける。

03 デザイナー
池上佳代子さん［宇和］

08 わらぐろ、わらマンモスづくり
二宮宣雄さん、井上勲さん［宇和］

13 どろんこのうた
境　博美さん［野村］
渡邊健吾さん［野村］
仲野　猛さん［宇和］

写真提供：小林絵里子

<連載>

17 地域をふかぼりフィールドワーク
天然素材で絵の具をつくってみよう

19 知の地層
「観察を通して考える
ネイチャージャーナリング」小林絵里子さん

21 ひろがる本棚　私のおすすめ

『だいちのめ』は、私たちの暮らしと大地との関わりを研究し、ジオパークについての理解を深めることを目的に作られたフリーマガジンです。ジオパークは持続可能な社会の実現を目指すプログラムであり、国連が定めたSDGs（持続可能な開発目標）とも深く関わっています。

Creating something requires the power to create.
But there may be another kind of creativity
in continuing to do so.

〝つくる〟を続ける。

Peacock Bride Designer
Kayoko Ikegami

Straw Mammoth
Isao Inoue, Norio Ninomiya

Doronkonouta Poetry
Hiromi Sakai, Takeshi Nakano,
Kengo Watanabe

ものをつくるには、創造する力がいります。
けれど、それを続けていくことにも、また別の創造性があるのかもしれません。
同じことを繰り返しているように見えても、その出発点となる人や素材、そしてそれらをとりまく環境には変化があり、新たな発想や工夫が静かに息づいています。
このまちにも、自ら手を動かし、試行錯誤を重ねながら、それぞれの〝つくる〟を続けている人たちがたくさんいます。
誰かのために、あるいは自分の喜びのために―
〝つくる〟ことを続ける人たちや、その様子を見守る人たちにお話を聞いてきました。

写真・文：加藤雄也、加藤千晴
※誌面に掲載した方々の所属や肩書は、令和7年3月時点のものです。

“つくる”を続ける。

Creating something requires the power to create.
But there may be another kind of creativity
in continuing to do so.

ウェディングの多様性を探求しながら、創り続ける。

池上 佳代子さん

デザイナー

福井県出身。宇和町在住。ロサンゼルスに本社があるアパレルショップのデザイナーを経て、オーダーメイドのウェディングドレスブランド「PEACOCK BRIDE」を立ち上げる。ウェディングプロデュースチーム「瀬戸内ウェディング」では、フォトウェディングや結婚式の空間演出などのビジュアルディレクションを担当。

https://www.peacock-bride.com

松山市にウェディングドレスのショールームを構えながら、西予市を拠点にドレスの製作を続けている池上さん（通称チョコさん）に、地方で暮らしながらものづくりを続ける想いについてお聞きしました。

ーチョコさんは、今のお仕事に至るまで、どんなお仕事をされてきたんですか？

東京にある服飾デザインの専門学校を卒業した後、都内のアパレルショップでデザイナーチーフとして働いていました。そこではデザインの仕事だけじゃなく、販売接客から海外でのバイヤー業務、店舗のディスプレイやカタログ撮影、モデル探しに至るまで、幅広い業務を自分たちでやる環境で。

ー大変そうだけど、やりがいがありそうです。

そうですね。カタログ一つとっても、「広告代理店を通すとクオリティは上がるかもしれないけど、型にはまってしまって、自分たちらしさが失われるから」というオーナーの想いから、「できることはまず、自分たちで」というスタンスでみんな仕事をしていました。毎日が創造的で、やりがいを持って、楽しく働いていましたね。

当時は、雑誌に載っている原宿などのマップを見ながら、自分好みのお店を見つけるのが楽しいっていう文化もあったんです。でも、その一方で、時代の流れとともに個性的な路面店が徐々に減って、駅ビルなどの大型商業施設にテナントとして入るマーケティングが主流になっていって。

それで、私が働いていたショップも結局、駅ビルへの出店が決まって、その時に漠然とした不安を覚えたんです。お店の個性が薄れて、似通ったデザインが出回り、最後には駅ビル内での狭い価格競争に巻き込まれてしまうんじゃないかと。

ーたしかに…。

結局その予感が的中して、だんだん「どの店舗が一番早くセールを始めるか?」という状況になっていきました。

チームで企画して、縫製工場の方と何度も話し合って、せっかく良い縫製方法で作ったお洋服も、数週間後には値下げされる状況になってしまって。その時に、「こんな短いサイクルと環境でものづくりをすることは自分に合っているのか?」、「このままでは本当に良いものを作れなくなるんじゃないか?」と、大量に生産して短い期間で販売する仕組みに疑問を感じていたんです。

そんな時、ちょうど同じようなタイミングで、旦那さんとご縁があって、西予市に移住を決意しました。

ーそうだったんですね。

それで、これからの仕事について考えた時に、「衣」には携わっていたいなと思って。もっと一人ひとりに深く入って作ることができる「衣」…ウェディングドレスだったら、特別な日の貴重な選択だから、特別な一着を求める人がいるはず、そう感じてドレスを作り始めました。

ーなるほど。

もう一つ、きっかけがあって。東京にいた頃、友達のドレス選びに付き添った時に、とても印象的な体験をしました。最初に提示されたドレスは低価格だったのですが、その金額でレンタルできる物はほんの数点しかなく、サイズが極端に大きかったり、許容しづらい使用感があったりするもので。「追加料金を払えば、

新作をお選びいただけます」と案内をされて、どんどん金額が上がっていってしまい、友達は困り果ててしまいました。そして、高額なドレスについても、「この部分は素敵だけど、ここはちょっと好みと違う…」と、どこかで妥協を強いられて、お金でも解決できない状況でした。

その時に、夢を抱いて選ぶはずのウエディングドレスが、こうした仕組みの中で決まっていくことに違和感を覚えて、「この価格なら、もっと質の良い生地を使って、その人に本当にふさわしいデザインの一着を作れるはず」と、確信をした出来事でした。

―そうだったんですね。

だからこそ、PEACOCK BRIDEのドレスづくりでは、花嫁が心から喜べる一着を届けることを大切にしています。ストレスを感じながら選択をするのではなく、「このドレスは私のためのものだ」と自信を持てるような体験をしてほしい。もっと、創造的な選択肢を広げることに役立ちたいなと思っています。

―では、西予市に来てからドレスを作り始めたんですね。

はい。せっかく西予に来たから、東京でできることはあえてやらず、ここでしかできないことをしようと思って。都内の慌ただしい環境の中でドレスを作るイメージは湧かなかったけど、自然に囲まれたこの場所でなら、のびのびとものづくりができると感じたんです。

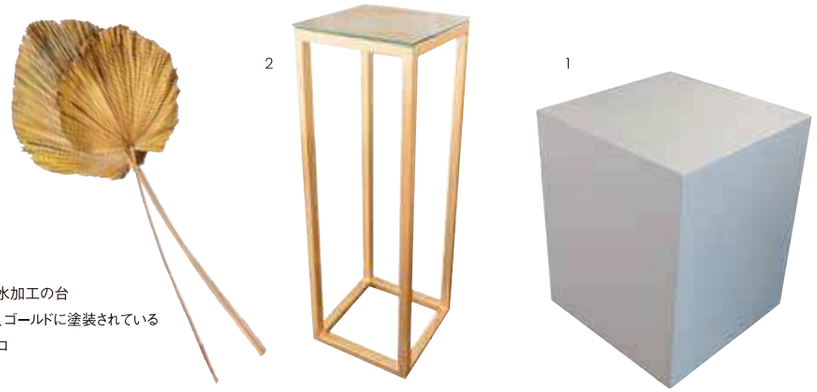
―確かに、のびのびできますもんね。

これまで大量生産の現場を経験してきたので、一度そこから離れて、一人ひとりに向き合うものづくりがしたいと思って。まずは二次会用のドレスの受注からスタートして、経験を重ねながら、本格的なウエディングドレスの製作へと進めていきました。

―チョコさんは、フォトグラファーの方と組んで、自然の中での撮影（フォトウェディング）も手がけられていますが、お仕事の中で自然をどう見ていますか？

自然は、最高のスクリーンですね。

宇和町明間のお茶農家・明芳園さんご夫妻のフォトウェディング
写真提供：© SETOUCHI WEDDING



1　特殊な塗装で作られた防水加工の台
2　鉄工所と一緒に作った台、ゴールドに塗装されている
3　ゴールドに塗装されたシュロ

余計なセットを組む必要がなくて、そのままで美しい。だから、この環境を生かしながら、歴史ある町並みや豊かな景色の中で、ここにしかない表現をしたいと思いました。

あと東京と比べて、愛媛は光の差し方がまったく違うんです。光が違うと、色の見え方も変わって、写真になるとそれがより濃く出ます。その影響で、私自身も表現したいものや、色彩感覚が広がったと思います。

それと、日常生活の中で、「これは撮影に使えるかも！」と思うものを見つけることも多いですね。例えば、車を運転している時に、大きな松ぼっくりやシュロを見つけたり。

―西予って、仕事しやすいですか？

はい、とても。自然が豊かで、食もおいしい。

あと、「ドレスに西予市のシルクを使いたい」と花嫁さんに言われた時、シルク博物館に行ってハギレを分けてもらったこともあります。今、シルクは貴重で手に入りにくくなっているんですよ。

また、ウェディングの空間づくりをする時に、市販のものではしっくりくるものが見つからないことがあって。そんな時は、西予の職人さんに相談して、一緒に花器や台を作ることもあります。試行錯誤しながら、地元の人と一緒に形にしていく過程が、とても楽しいです。

―地元の人と一緒にものづくりができるっていいですね。

私が西予に住み、作り手に近い環境の中で協力してもらっているからこそ、実現できていることだと思っています。ドレスの縫製を手伝ってくれている方の一人も、西予で出会った方なんですよ。

一般的なお洋服のオーダーメイドが主流だった時代から縫製をされていて、一流デパートの紳士服や婦人服の仕立てやお直しも担当されていたプロフェッショナルな方で。「あなたドレスのデザインをされているんでしょ？お手伝いできることない？今は既製服の時代だから、スーパーでのお直しばかりで楽しくないの」と突然お電話いただいたんです。とても嬉しくて、ありがたい出来事でした。

―オーダーメイドでドレスを作られていて、難しいことはありますか？

今は大量生産で作られた既製服が主流で、一着の衣服がどのように作られているかという背景を知っている方が少ないため、既製服とオーダーメイドの工程の違いがわからない方もいらっしゃいます。

だからこそ、ドレスを作る方にはデザインから仕立てまでの工程も丁寧に伝えながら進めています。そうすることで、一着ができるまでを理解して、今後既製服を選ぶ時の基準になればいいな、という想いもあって。私なりの裏テーマです（笑）。

―裏テーマ（笑）。例えば、いい服ってどんな風に作られているんですか？

例えば、ハイブランドの服でレースを使う場合、美しい柄が途中で切れてしまわないよう、柄に沿って丁寧に縫い合わされています。セーターの場合は「編み立て」といって、ニッ

トになった生地を後から縫い合わせるのではなく、最初から完成形に編みあげる技術が使われることもあります。シルエットの美しさと機能美が、細部まで丁寧にデザインされているんです。

そういった違いを知ると、単に高価な服ではなくて、品質の良い服を見極められるようになりますよね。お客様とそういった話をしながら、価値を共有していく時間も楽しいです。

ーすごく楽しみながらお仕事をされている様子が伝わってきました。あらためて、その根っこにある想いをお聞きしたいのですが。

自分らしさを大切にしてほしいです。人生の大切な節目に、その人その人の生き方と個性を祝福する純粋なブランドでありたいと思っています。今はSNSが普及して、広がりがあるようで、実は均質的なものが氾濫しているだけだったり、その中で意図しないところで人と比べられたりするような、閉塞感のある環境のようにも思います。だからこそ、自分の「これが好き」や自分の魅力を発見する瞬間に、一緒に出会っていきたいです。

ーうんうん。

また、ドレスづくりで花嫁さんと話していくうちに、どういった場所でそのドレスをまとうのか、結婚式でのゲストへのおもてなしやパーティーの環境にも選択肢が少ないと気づいて。本当にその人らしいおもてなしやパーティーを、結婚式という特別な日に表現できているのかな?-せっかくのお祝いの場に、もっとバリエーションがあってもいいんじゃないかな?-と感じるようになったんです。

「結婚式当日はただ慌ただしく過ぎていってしまう…」とよく聞きませんか?

ー経験があります(笑)。

特別なふたりの時間を、もっと大切にできないかな?-と。結婚式だからこそ、大切な人たちと穏やかに過ごしながら、地元の食の美味しさを深く味わうような、そんな丁寧なおもてなしができる日であってほしい。そんな結婚式があってもいいと思うんです。

ーいいですね。

西予で暮らしていると、そういったシンプルで大切なことに気づかされます。こういった想いを共有できる方や、施設と一緒にお仕事をしていく中で、自然と「瀬戸内ウェディング」という形に繋がっていきました。

ーなるほど。

ウェディングの世界は流行りによって画一的になりがちですが、一過性の流行に流されるのではなくて、何十年後かに振り返っても、「自分たちだけの本物の時間だった」と思えるような、心に残る結婚式を大切にしたいですね。

瀬戸内だからこそ生まれる発想や、地域の魅力を活かしたウェディングを形にしながら、その場所でしかできない特別な体験をしてもらいたい。そしてそんな体験を他の地域のカップルにも届けていく。そうやって、今後も自分たちらしくウェディングの多様性を探求していきたいです。

撮影:鈴木友三郎

わらマンモスとわらぐろ これからも風景を つくり続けるために

二宮 宣雄さん(写真右)

井上　勲さん(写真左)

宇和町岩木在住。米づくりをしながら、わらぐろやわらマンモスなどの制作を行う。わらマンモスの制作は、地元の住民有志によって継続されており、お二人は初期からその中心的な役割を担っている。

宇和盆地の名所として定着した感のあるわらマンモス。そのマンモスを作り続けるお二人にお話を伺いました。

わらマンモスのはじまり

ーまずは、わらマンモスが作られ始めた経緯を教えてもらえますか?

宣雄ー瀬戸内国際芸術祭というイベントの時に、香川の小豆島で、わらマンモスを展示しとったらしいんです。それを見た市の職員さんが、宇和のれんげまつりでもぜひ展示をお願いしたいということで、武蔵野美術大学の先生や生徒さんに頼んで来てもろうて、住民と一緒にマンモスを作ることになったんよ。あれはれんげまつりの35周年の時(2011年)やったかな。

それで岩木に井上組という会社があってな。鉄塔なんかを建てたり高いところで作業したりする工事を受けてやりよんなはったんよ。そこで勤めた経験のあるいさちゃん(勲さん)が非常に身が軽いし、今までやってきたノウハウもあるんで、マンモスづくりの中心になってもろうて。地域の役員とかそういう人を集めて一緒にやってもろたんよ。そ

れが初め。

　最初はなぁ、今みたいな鋼管パイプじゃなしに、4センチ角ぐらいの角材を組み立ててやりなはったのよ。で、完成したマンモスを壊すのは勿体ないぞということで、JRの伊予石城駅の前、今、農産物の加工所があるでしょう。あそこにちょっと広いところがあって、そこへ持っていって展示しとったんよ。

武蔵野美術大学が制作した初代わらマンモスの模型

―マンモスを？ 最初はあんまり大きくなかったってことですか？

宣雄―うん、3、4mくらいじゃなかろうか。今のに比べたら、最初は非常に小さかったんよ。で、置いとったら結局、台風の雨と風で潰れてしもうたんやけど、次の年からどうする？って話になって。それで、もうせっかくやったんじゃけ、続けてやらないけまいって。

―なるほど。

宣雄―笠置文化保存会でも会長を引き受けてから、みんなにマンモスもやろうという話をして、保存会のメンバーの大半を引っ張り込むような形になったんよ。

　ほれからどんどんやりだしてな。みんな雑誌とかに載っとるマンモスのイラストを持ち寄って「こんなんがえぇんじゃなかろうか」と話し合ったりして。毎年、鼻を下げてみたり上げてみたり、牙を太くしてみたりといろんな工夫をして、少しずつ形を変えながら作ったな。骨組みには鋼管パイプを使うようになったんやけど、ベンダーでパイプを曲げるのも大変やった。

　展示する場所も最初は今の場所じゃなくて、れんげ祭りの本部になる田んぼやったんよ。でもやっぱり農作業の邪魔になってしまうけん、場所を変えようということで、2014年から勲さんがここの田んぼでやれやと言うてくれてな。

勲―今の場所でも初めは、れんげまつりが終わったら壊して毎年作り変えよったんよ。何年目かのときに、当時、宇和わらぐろの会をやりよった上甲清さんがな、「たくさん見に来る人がおるんやけん一年間ずっと置いとったらええのに」って、言いなはってな。それで動かさんようにしたんよな。

鋼管パイプを曲げるために使われたベンダーとマンモスの骨組み

宣雄―30坪くらい稲を植えれんけん、本当はいさちゃんにいくらか払わんといかんとこやけど、無償でやらしてもらっとる。

マンモスづくりの工程

宣雄―3月に入ったら、そこのビニールハウスでわらを編んで、マンモスの毛皮にする「わらとば」（稲わらを編んで作ったシート状のもの）を作るんよ。これもな、初めはマンモスのあるところでやりよった。

―現地の田んぼで？

勲―そう、現地で。

宣雄―ほれで寒うてな。風は吹くし、霜が降りとるようなところで、テントを立ててな（笑）。

―風が強いとテントも飛ばされそうになりますよね。

宣雄―ほうよ、防風ネットを張ったりしたなぁ。

勲―ようやったなぁ、あれも。何年やったやろか。

宣雄―5、6年はやったなあ。寒い思いしながら（笑）。

―わらとばづくりには、どれくらいの時間がかかるんですか？

宣雄―大体2週間ぐらいでできる。1日に4、5人来てもろて、大体60人分くらいの仕事かな。そのぐらいで大体220～230枚作るんよ。ほれで大きいマンモスと小さいマンモスの分ができる。わら細工なんかを作る女性の会「おイネクラフト」の人らにも手伝ってもらったりしよった。

　で、これ、わらの取り換えにも大体5、60人役ぐらいかかるのよ。大体4、5人でな、10日ぐらいかかる。やから、3月の20日ぐらいから始めたら4月の初めぐらいで大体ふき替えが終わる、ということやな。

―3月、4月って農作業も忙しくなる時期じゃないですか？

勲―3月の末から4月に入ったら田すきが始まる。だけどまあ一応、農閑期の時期やから、割合やってもらえるかな。これがもうちょっと遅くなると、みんな忙しくなってなかなか作業できんのよ。

わらとばづくりをする二宮照行さん

宣雄―3月の半分以上はやっぱかかる。まあ、わらとばづくりはな、女性の方にも手伝ってもらって、男手はおらなくても大丈夫なんよな。

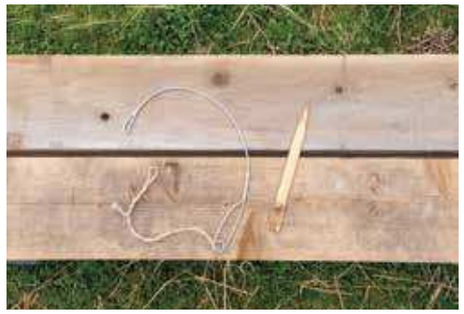
―マンモスのふき替え作業をしているのは、みんな岩木の人なんですか？

宣雄―そうやな。勲さんと何人かの、もういつもやるメンバーしか高いとこ、危ないとこはよう上がらん。去年も地域づくり活動センターから若い人らが来てはくれたんじゃけど、やっぱり怪我をされると困るんで。あんまり上がれ上がれとも言えんのよ。だからできるだけ、安全に足場を置いてできるようになったらいいかなと思って、いろいろ考えてみるけど、なかなかなぁ。

勲―夜寝ずに、いろいろ考えなはるんよ。わらを胴体に取り付けていく時に使う道具も、手作りしなはって、2人でしよった作業を1人でできるようにしたり。これはすごい、素晴らしい大発明よ。

宣雄―針金を曲げて作っとったけど、一緒にやっとるメンバーの1人がきれいに溶接して作ってくれたんよ。

勲―あれは本当、画期的やったな。


わらとばを骨組みに縛り付けるときに使う道具

宣雄―やっぱり一番時間がかかるのが、足と鼻。細かい作業がいるんで、ああいうところはなかなか能率が上がらん。胴体は、3mくらいの長いわらとばの片方を留めてすーっと伸ばしたら、1人でもチャッチャと作業できる。そうしたら、ものの5分でかがってしまうけんな。

―足や鼻から作っていくんですか？

勲―下からよ。

宣雄―わらとばを上へ上へと掛けていかんといけんから、下から上に上がっていくの。鼻は後からでもできるけんな。足からやな。

勲―足もな、こだわりがあるんよ（笑）。動きよるように、こう。

―へぇー！

宣雄―やっぱりな、生きものじゃからな。生きとるように見せたいというところがあるんよ。だから、ただまっすぐ突っ立っとるんじゃなくて、膝曲げたり、鼻曲げたり。（わらマンモスの写真を見ながら）前脚がこう曲がったら、後ろ脚はこう曲がらんと。ほいで、ここら辺の毛並みはこう斜めに、こっちもな毛並みが斜

めになっとるんよ。犬もな、毛の生え方を見よったらそうなんよ。背中はこう、ぺたっといくけんど、横とかなんかはやっぱり下向いとるよな。

—あー！ほんとだ！

宣雄—毛並みが。

勲—宣雄さん、こだわりなはるけんな（笑）。楽しみながらやんなはる。

—マンモスのわらは、わらぐろのわらを使われているんでしたっけ？

宣雄—そう。近くの田んぼでわらぐろを並べて作ってあろう？あのわらを使いよる。

—大体どれくらいの量のわらが必要なんですか？

宣雄—あの田んぼのわら、あれ全部じゃないけど、ほとんど使ってしまう。

わらぐろの話

—わらぐろは、マンモスを作る前からずっと作られていたんですか？

宣雄—うん、わらぐろはこの地域一帯で昔からやりよったんじゃけんど、もうな、だんだんと作らんようになってしまっとったんよ。

もともと、わらぐろはな、わら細工に使ったり、俵にしたり、牛の餌にしたりと、わらそのものがいろいろと使われとった時代に、わらを保管するものとしてみんな作りよったんよ。やけど、俵も紙の袋になったでしょ。ほれから牛ももう飼わんようになってしもたけんな。だからあんまりわらがいらんようになったんよな。それに、コンバインで稲刈りをやると、あれ、わらを切り込んでしまうけんな。

でも、マンモスと同じような頃からやったかなぁ、あちこちでまた作り始めたわいな。

脱穀したわらを積み上げて作る「わらぐろ」

勲—うちは、牛を飼いよる人らが、わらぐろを作ってもらったらそのわらが乾いた頃にもらいたい、と。そういう話があったと思う。わらぐろはこれも練習がてら、エセみたいなのを作りよったけんな。

宣雄—まぁな、わしらもそうやった、初めはしばらくやっとらなんだけん。

勲—今も作った後に、いっぺんは直さんといかんけどな。どうしてもわらが下がってくるけん。

宣雄—乾いてくるとだんだん収縮するけんな。

勲—笠の部分と下の積み上げ部分に隙間ができるのをふさがんと、水が入ってくるんよ。今年も1月か2月ぐらいに、整えた。

わらマンモスと農業のこれから

—マンモスづくりの後継者はいらっしゃるんですか？

宣雄—まぁ早く、若い後継者ができんと俺たちも安心してあの世に行けんのじゃが（笑）。

勲—マンモスは仲口さんいうて少し若い人がおって、頼りにしとるんよ。仕事で安全管理の面が頭に入っちょる人やけんな。わらとばのふき替えのときも、今までやりよったような足場では危ない、もし事故があったらいけん言うて、去年から、プロの足場を借りてきて、それを組み立ててやってくれたりもしとる。

勲—わらとばづくりにも来てもらうしな。家はこの近くやけん。

—なるほど。組み立てもそうですけど、材料のわらも確保しないとい

ふき替え作業中のわらマンモス。今年は実験的に上から新しいわらとばをかぶせる方法を試している。

かんですよね。

勲—うん。わらは一応、うちの後継者が。

—おぉ～！

勲—わらぐろも、最近、若手の農家が石城小の子らに教えたりしよるよな。

宣雄—直近の困りごとは、今年は岩木でため池の改修があって、50町歩ぐらい、稲を植えれんのよな。岩木の田んぼのだいたい半分ぐらいは植えれん。マンモスにしろ、わらぐろにしろ、どっかからわらを持ってこんといけんな。

勲—持ってこないけんな。

—わらを運ぶのも大変ですよね。稲を植えられない間は、何か補償みたいなものはあるんですか？

宣雄—いや、補償はないんよ。地区のため池の改修やけんな。

勲—昔みたいに転作奨励金みたいなのがあったら、畑作でもするんやけど。もう放置するだけやな。草が生えると時々田んぼを起こすぐらいで、何もせん。

—そうなんですね。池の工事は、今年1年で済むんですか？

宣雄—いや、わからんのよな、これ。2年かかるかもしれん。

—なるほど。私らはマンモスを楽しませてもらうばっかりで、今は風景の一部として、当たり前にあるものみたいに思ってしまっているところがありますが、お米を作り続けられる環境があって、お米を作り、わらを取っておいてくれる農家さんがいて続いていくものなんですよね。

一方で、以前に比べると、宇和盆地もだんだん田んぼが減って、マンモスの周りの環境も変わってきている気がします。

勲—ずいぶん前から米が余るんで、転作奨励金というのを出して、どんどん田んぼをやめる方向に国が持っていったけんな。ほんで、それをいきなり取りやめたりもしよるが。まあ、農家は国に翻弄されよる。

宣雄—認定された大規模農家にだけ補助がつくようになったりな。もちろん、大規模農家は必要なんじゃけど、中小の農家を切ってしまうと、地域社会が崩壊するよな。大規模のとこで手を伸ばせないところを担う、そういう人たちもちゃんと農業を続けていける仕組みが必要やと思うな。そうせんと、耕作放棄地ばかりになってしまう。だからそういうところをこがいな年寄りが少しずつやりよるような形なんよな。

勲—そうなんよな。

宣雄—結局何でも続けるのはもう、特別な意識を持って意義とか何とか考えながらやるんじゃなくて、また今年もやらなきゃいけない、また今年もやらなきゃいけないぐらいの感覚でやらんといけんと思うんよ。

—でも、昔からある行事でもやらなくなるものと、そうじゃないものがあるじゃないですか？その中で、これは今年もやらなきゃいけないって思うのはどういう理由なんですかね。

宣雄—そうやな…それはやっぱり、「役」があるけんな。自分らは、地域の中で役目を負うたら、去年やってくれた人がおるけん、わしもやらないかんという意識があるんよな、やっぱり。

勲—我々の世代は、地域のことには協力しなきゃいけんという信念がもう昔から染みついたものがあるけんな。まぁ、今の若い人からしたら、ちょっと抵抗がある世界かもしれんけど。

宣雄—でも、「やらないかんのよ」という、それ以上の理由はないんよな。

1966年に開園した野村学園では、知的障がいのある人たちが寮生活を送っています。1970年ごろから詩教育が始まり、仲野猛さんの指導のもと、学園の利用者さんがつくる版画詩は、「どろんこのうた」として知られています。

今回は、「どろんこのうた」が生まれる現場を取材しました。

―まず初めに、野村学園について教えていただけますか。

境―野村学園には、指定障害者支援施設、第二障害者支援施設、障害児入所施設という3事業所があります。児童部では小学3年生が最年少、成人部では60代後半の方が最年長です。特に特定の年代が多いわけではありませんが、南予地区の他施設と比べると、平均年齢は少し若いかもしれません。成人の利用者さんは、南予地区の方が比較的多いです。ただ、児童部は、すべて中予地区のご家庭の方ですね。

うちは通所の方はいらっしゃらなくて、全員が入所されています。休日や学校の長期休みに、地域の方が一時的に昼間利用されることはあるんですけど。

―一日の過ごし方はどのような感じですか？

境―児童部の子どもたちは、平日は学校に通っています。成人部は午前中が主に活動の時間で、アルミ缶のリサイクル作業をしたり、農作業をしたり、歩行運動などを行ったりしています。版画詩の制作活動は、毎週水曜の午前中に行っています。午後は主に入浴になります。

―外出は、近隣が多いんですか？

境―普段の歩行運動は近隣が中心です。時々、施設のバスで宇和の運動公園とか城川の龍澤寺などに出かけることもあります。今はちょうと野村ダムが工事してるじゃないですか。本当は野村ダムのまわりをずっと歩いたりしてたんですけど、今はそこが通行止めで立ち入りができなくって。だから学園周辺を歩くことが多いですね。旅行で県外に出かけることもありますよ。

詩を通じて社会との関係性を築く。

境　博美さん
社会福祉法人
西予市野城総合福祉協会
野村学園施設長

渡邊 健吾さん
野村学園職員

仲野　猛さん
野村学園 非常勤講師

渡邊さんは「どろんこのうた」をつくる版画班を担当して5年目。仲野さんは、野村学園職員時代に、詩教育の活動を始め、「どろんこのうた」を世に送り出してきた。

―買い物などは、どうされているんですか。

渡邊―そうですね、それぞれの利用者さんに担当職員がおりまして。私の場合やったら、担当の利用者さんのうち2人ずつぐらいと月1回、野村のまちなかに買い物に出かけています。

利用者さんも喜んでくれるんで。逆に行かないと「なんで今月はいつもの買い物がないんだろう？」と不安定になったりすることがあるんです。

―「どろんこのうた」の創作活動について教えてください。

境―詩の創作は、1970年代から仲野猛先生がずっとやってこられていて。退職されてからも、ボランティアで指導に来ていただいております。版画活動の担当職員は4人ぐらいいるんですけど、渡邊がその責任者という形で、展示会の準備などをやってもらっています。

―利用者さん全員が創作活動をしているわけではないんですか？

境―そうですね。今は版画班に入っている方が行っています。文字を書いたり、彫刻刀を使ったりするので、基本的に書くことや彫ることができる方が参加している、ということになります。

渡邊―版画班には、大体30人くらいの方がいます。それを5、6人ずつ4つのグループに分けてローテーションで仲野先生と一緒に活動します。だから、詩の指導を受けるのは利用者さん1人につき、月1回くらいのペースで、年間で12回ぐらいです。

基本は水曜の午前中ですが、仲野先生が午後も2時くらいまで残ってくださることもあって、その時は希望者だけ午後も一緒に活動することがあります。

―版画詩の制作は、どれぐらいのペースで進むんですか？

渡邊―もう本当に人それぞれですね。週1回の作業で1個作る人もいれば、1ヶ月で1個、あるいは1年で1個だけ作るという方もいます。人によって全然スピードが違いますね。

―作るときには、どういうサポートをされるんですか。

渡邊―基本は仲野先生が来られているので、先生を中心に指導していただきます。最初は利用者さんに、思ったことを自由にノートに書いてもらいます。例えば、今日何食べたとか、どこに行ったとか、何が綺麗だったとかそういういろんなこと、思ったことをまず率直にノートにたくさん書いてもらう。それを先生とのやり取りで詩の形にする。その後、絵を描き、詩と一緒に版画板に転写をして彫っていくという流れです。もちろん、全ての作業を1人で行うのが難しい方もおるので、職員も手伝うことがあります。

―素人の質問で恐縮ですが、そもそも詩ってどうやって作るんですか？

渡邊―うーん、書いているのは本当に日常のことなんですよ。これは「ウグイスがあいさつをしてくれます」という詩ですね。素朴なんですけど、それぞれの利用者さん独自の感性とかものの見方があるというか。そういうのが面白いなと思いますね。題材は、本当に日常のことですもん。利用者さんが思うことを書き出してそれを版画にするんです。

―版画詩の制作は、1年を通して行われているんですか？

渡邊―そうですね。大判のカレンダーに使う作品は毎年、大体7作品選ぶんですけど、中にはそこを目指して作られる方もおりますね、少ないですけど。選ばれなかった作品も、学園が作る卓上のカレンダーに使用させてもらったりしています。

カレンダーが完成すると、そのお披露目も兼ねて展示会をやっています。ここ数年は毎年、まなびあんと松山の子規記念博物館では必ずやっています。

―仲野先生の著書に、版画詩の制作というのは「社会参加の一つの方法」と書かれていたのですが、実際にどう感じていますか？地域社会との関係はどうでしょう。

境―昔と比べて、地域のお店に行っても全然、問題は感じないですね。お買い物とか美容室とか、いろんなところに利用者さんは行きますけど、困ることはほとんどありません。多少お会計に時間がかかったりもしますけど、それが問題になることもなく。野村には、野村育成園さんもありますし、昔よりは利用者さんがまちに出やすくなっているという気はします。

（どろんこのうた館へ移動）

渡邊―ここで毎週水曜日の午前中に、版画詩の制作をやっています。仲野先生もおられるので、いろいろ質問してみてください。

―ありがとうございます。そもそも、「どろんこのうた」っていう名前はどこからきたんでしょうか？

仲野―もともとは粘土遊び（粘土療法）から始まったんです。遊びの中で、柔らかい粘土板に針金で字を書いたことが始まりでした。造形を何でも自由にやっていく中で、詩もまた自然に生まれたんです。そういう形で出発して、それを「どろんこのうた」と呼んでいます。

―粘土療法というのは、手を使うことが療育につながるんでしょうか？

仲野―そうですね、手だけでなく全身を使って集中し、楽しみながらやる。そのことで治療が進み、最終的には自己実現につながる。楽しんでやることが一番能力を伸ばすんじゃないですかね。

―先生の著書に、「感動する体験から詩が生まれる」と書かれてありました。「どろんこのうた」には、家族のこと、お友達のこと、学園生活、身近な自然といったものを題材にしたものが多いようですね。

仲野―そうです。感動や日々の生活体験の中から自然と詩が生まれてくるというか。

―仲野先生の関わり方についてお聞きしたいんですが、詩の創作で困っている様子とかがあったりしたら、声をかけたり、お話を聞いたりみたいな、そういう感じなんですか？

仲野―もう最初は自由にノートに書いていって。その書いた文章の中から、詩の形を選んでいきます。ちょっとペンが進まん人には、「運動場の雪がとけたね」みたいにお喋りしながら生活を振り返って、詩のきっかけを与えるというか…。詩がないと説明ができないな（笑）。

　えーっと、今やっていることがこれなんですね。うん。「私の詩からええ文しょうだけとってください。ええ文しょうだけ」。たくさん書いた中から、良い文章だけ取ると、それは詩の形になるんですよ。でもこの詩の形を抜き出すということは、なかなか本人らはできないので、指導します。

―なるほど。どの部分を選んで抜き出すかっていうのは、もう仲野先生の長年の経験というか…。

仲野―そうですね。

―だとすると、本当に利用者さんと仲野先生の相互作用というか、関係性の中で「どろんこのうた」は生まれているんですね。

仲野―そうです。交流して生まれた信頼関係の中で、自然に詩が生まれると思います。日常生活の中で、信頼関係ができておりますので、みんな楽しみながら取り組んでいます。

　「好きこそものの上手なれ」ということわざがありますがね。芸術の道で大成する秘訣だということで永井荷風も言っています。『小説作法』という本に書かれております。

―利用者さんたちは、いい詩を作るために何か特別なことをされているんでしょうか？

仲野―ほかの人が書いた詩や、自分が作った詩を読むことはありますが、思ったこと、感じたことをあるがままに自由に書いてもらうというのが大事なんでね。その中に詩の形があるんで。特別に何かをするわけではありません。

―みなさん、詩も絵も両方、かかれるんですか。

仲野―両方かきます。これ、利用者さんの詩集なんですが、詩がたくさん溜まれば個人の詩集にするんです。詩を書いたら必ず余白に絵を描いてもらうんですね。それが習慣になっとりますので。

―利用者さんが詩を書くのは、この時間以外にもあるんですか？

仲野―そうですね。好きな人は書いたりしてますね。日記を書くみたいに。みんなノートを持っておりますので。

　この人はベテランです。寮生活の中でもう20～30年書いてますからね、ずっと習慣で。

―それだけ長い間続けられていると、こういう風にある程度詩の形にしたものを書いてこられるんですか？

仲野―いや、最近ですね。こういう風に書き始めたのは。それまではいっぱい文章を書いて、その中から詩を抜き出してました。こういうのは最近です。

　先輩の詩集を見て、自分も詩集を目指して頑張っていきたいです、と書いているんです、この人は。

―仲野先生の著書の中で、詩を作ってカレンダーにして世に出すことで、「社会参加を目指す」と書かれてあったと思うのですが、活動を続けてこられて、社会の変化や反響を感じることってありますか？

仲野―それはもう、たくさんあります。この間まで松山の子規記念博物館で展示をしとったんですけど、展示会では、来場者に感想文を書いてもらうようにしています。芳名帳を置いて、自由に感想を書いてもらうんですけど、そこには、社会の人たちの「本当の声」が綴られています。

　展示会では案内役が非常に重要で、必ず人を置きます。人がいないと何も感想を書かずに出て行ってしまうのでね。

―確かに、書く機会がないと感想も残りませんね。

仲野―立ち話から、感想につながることも多いです。子規記念博物館での展示はまだ6回目くらいですが、「版画詩の原画が見たい」と言って来られる方や、書道や絵画をやっている方も多いです。そういう方からいただく声っていうのはすごく励みになります。

　今後も、展示会やカレンダー、書籍などで詩を通じた交流が広がっていけばと思っています。

版画に使われる地元産の伝統的な和紙・泉貨紙

裏表紙のまとめも見てね！

地域をふかぼり
フィールドワーク
08

天然素材で絵の具をつくってみよう

Let's make paints with natural materials.

人類は大昔から、自然の中にある岩石や鉱物、土、動植物など、身近にあるものを色材（天然顔料）として使ってきました。日本の伝統絵画である「日本画」の世界でも、こうした天然顔料の絵の具などが使われています。今回は、日本画絵具をまねて、天然顔料の絵の具づくりに挑戦します。

日本画絵具について

日本画で使われる代表的な絵の具を紹介します。

（参考）MAU造形ファイル　アートとデザインの素材・道具・技法

❶ 岩絵具　いわえのぐ

岩絵具は、文字通り岩石や鉱物を砕いて作られる絵の具です。もともと天然の素材から作られていましたが、他の顔料と比べて高価で希少性が高いものも多く、近年では製造が難しい色もあります。資源やカラーバリエーションにも限りがあるため、その代替品として昭和30年代から化学的に作られる「人工岩絵具」が生まれました。

岩絵具

❷ 水干絵具　すいひえのぐ

天然の土などに染料を染め付けて作られます。古くは泥絵具とも呼ばれていました。山から採ってきた土を水で精製して不純物を取り除き、干したものを絵の具として使います。

❸ 胡粉　ごふん

牡蠣、ホタテ、ハマグリなどの貝殻を砕いて作る白色絵具です。10年以上もの期間、貝殻を乾燥・風化させて作られるものもあるそうです。

胡粉

❹ 墨　すみ

油や松を燃やして採取した煤（すす）をにかわで練り固めて乾燥させたものです。
すずりで擦って使います。

絵の具ではありませんが、建物の塗料として使われる「ベンガラ」も、古代から使われてきた伝統的な天然顔料です。土からとれる酸化物が主成分です。

Let's Try!

準備するもの

① 金やすり（粗目）
② 絵皿
③ 乳鉢・すりこぎ
④ にかわ液
＋天然素材

日本画絵具は、西洋から入ってきた水彩絵具やアクリル絵具などと違って、通常は粉の状態で販売されています。使うときは、粉末に「にかわ液」を混ぜて、水でのばして使います。
固い天然素材を絵の具にする場合、素材を粉にする道具をそろえます。

※金やすりはホームセンター、ほかのものは画材用品店などで購入できます。

手 順

①洗って乾かした素材を、金やすりでみがいて粉状にする。

②きめが粗い場合は素材の粉を乳鉢ですり、さらに細かくする。

③できたものに、にかわ液を少量入れ、指でよく混ぜる。さらに水で適当な色味に薄めて使う。

やってみました！

身近な場所で集めた天然素材から、絵の具を作ってみました。みなさんも天然色の絵の具づくりをいろいろ試してみてください。（難易度は、編集部の実感によるものです。同じ種類の石でも、含まれる物質の比率や風化具合によって変わる可能性があります）

泥岩
難易度 ★☆☆

砂岩
難易度 ★☆☆

ウニのとげ
難易度 ★★☆

※ウニの仲間には、とげに毒があるものもいます。取り扱いには注意してください。

ヒオウギガイ
難易度 ★★★

石灰岩
難易度 ★★★

※黒い画用紙に描いています

日本画で使われる紙は、厚手の和紙が一般的です。和紙もまた植物という天然素材を原料に作られるもので、日本画絵具と相性が良いです。

★ジオパークの「サイト」になっている場所では、自然保護の観点から石の採取はできません。サイト以外の場所で石を拾う場合も採取して良い場所なのか確認し、必要最小限にしましょう。

知の地層

layer of knowledge

#7 観察を通して考える ネイチャージャーナリング

日本ネイチャージャーナルクラブ
小林 絵里子さん

「ネイチャージャーナリング」は、40年ほど前、アメリカのアーティスト、クレア・ウォーカー・レスリーさんが考案した自然観察の手法です。日々観察したことを、「ネイチャージャーナル」と呼ばれる日記に記録します。日本でネイチャージャーナリングの普及活動をしている小林絵里子さんに、その魅力をお聞きしました。

小学校の時に、アサガオなどを観察しましょうってやりましたよね。でも、観察の具体的な方法ってあまり教わらなかったような気がします。大人になってから、「あの時、よく見なさいと言われたけど、どこをどう見ればいいかわからなかった」という話をちょこちょこ聞くんです。そういう点で、ネイチャージャーナリングは観察の具体的な方法がわかりやすくまとまっているので、いいなと思ったんですね。

ネイチャージャーナリングでは、**「3つの言語」**と**「3つの問いかけ」**を組み合わせて観察を行います。

「3つの言語」

❶絵（簡単なスケッチ、図、地図など）
❷言葉（メモ、説明）
❸数字（数、長さ、角度など）

「3つの問いかけ」

- 気づいたことは？
- 不思議に思ったことは？（疑問）
- 何に似ていると思う？（連想）

絵で描く、言葉で表現する、具体的な数値を測るという「3つの言語」をバランスよく使うことで、様々な角度から観察できる。また、観察しながら気づいたことに対して、「こうなっているのは何でだろう？」と掘り下げたり、「この形は何に似ているかな？」と視野を広げたりする問いを立てることで、物事の法則や共通点など新たな発見につながる。疑問に思ったことや思いついたことは、答えや意味がわからなくても気にせずどんどん書いていくのがポイント。

Nature Journaling

ネイチャージャーナリングQ&A

Q. 小さな子どもと一緒にやるときのコツはありますか？

A. その子の能力の発達に合わせてやればいいと思います。絵を描かなきゃいけないから苦手だ、みたいな子は別に無理して描くことはなくて。葉っぱの形は周りをなぞってもいいよとか、見つけた色を記録するだけでもいいよとか、問いかけも「これなんでだと思う？」と大人が聞いてみるとか。それで十分だったりするんですよ。どうやって見るか、感じることをどう表現するか、ということが重要で、描けることが重要ではないんです。あとは、親が夢中になってやっている姿を見せるのも大事だと思います。

Q. ネイチャージャーナリングを続けるコツはありますか？

A. 常に道具を持っていること。あとは、気に入ったペンとか道具を使うことですね。あらかじめ完成形を思い浮かべて描くというものではないので、許された時間の範囲内で描けばいいんです。考案者のクレアさんも、「1日15 分でいいのよ」と言ってます。私も、空を見て天気のことだけをかいて終わることもあります。あまりこうしなきゃ、あぁしなきゃ、と思うよりも、描きたいものに出会ったときに気楽に描いてみるという感覚でいいと思います。

やることはシンプルなんで、どんな方にも楽しんでいただけるものだと思っていますが、特に体験してほしいのは、漠然とした不安を抱えている人。今はいろんな情報が溢れていて、この先どうなっていくんだろうみたいな、漠然とした不安ってあると思うんですよね。そして自分が何者か、という核がないと周りに流されてしまう。自然の生きものってみんな自由でいいねっていうふうに思いがちだけど、みんないろんな制約がありながら生きているんですよね。そして様々な生きものが繋がって、一つの調和ができているわけで…。自然と向き合ってじっくり観察していると、だんだんそういうことがわかってきます。

ネイチャーっていうのは自分の外にあるものっていうイメージだけど、自分の内にあるものもネイチャーなんで、全部繋がっていて、人間も自然の一部なんですよね。そう考えると、人間も他の生きものと同じで、別に自分に何が欠けてようが、その人はその人なりの生き方があるってことを自然が教えてくれているわけですね。**自然と対話をしながら、自分は誰であるか、何を考えていて、どう行動したらいいのかとかそういうことがわかってくる。**このステップが大事だろうなと私は思ってるんです。

ネイチャージャーナリングで養われるものの見方は、自然だけでなくいろんな物事に対して応用が利きます。そういう意味で、ネイチャージャーナリングは、自然が好きな人が自然を観察するためだけにやるものではなく、生きるために必要な基礎だと思うんです。

だから、足元の自然でもいいし、草花でもいいし、普段食べてる野菜でもいいんですけど、足を止めて目を向ける時間を作る。忙しいけどちょっとの時間をそういうことに費やして、少しずつ積み上げていくということができたら、それが生きる力になっていくと思っています。

こばやし・えりこ＞東京都生まれ、高知県在住。日本ネイチャージャーナルクラブ主宰、ネイチャーアーティスト。

四国西予ジオパークのミッション ver.2021.09

Mission of Shikoku Seiyo Geopark.

ジオパークの根っこにあるのは、「大地へのリスペクト（感謝と畏れの気持ち）を持って生きよう」という価値観です。自分たちの足元をしっかりと見つめ、社会が抱える重大な課題と向き合い、新しいライフスタイルや社会の実現にチャレンジしていくーそれがジオパークの活動です。四国西予ジオパークでは、以下のことを大切にしながら活動に取り組んでいます。

1 大地を見る目を養う。

日本は4枚のプレートの境界に位置し、地球上で特に大地の活動が活発な場所の1つです。地震、火山の噴火、土砂崩れといった大地の活動は、人間が暮らす土地を形づくる一方で、時には想像を超える災害をもたらします。平成30年7月豪雨での大きな被害は、「この土地でどう暮らしていくのか」を私たちがあらためて考える機会になりました。私たちは、大地の特性を見抜ける目を養い、大地への感謝と畏れの気持ちを持って生きる人を増やしていきます。

2 自然や文化の多様性を大切にする心を育む。

地球上では場所ごとの自然環境に合わせて、多様な生活様式や価値観を持つ人々が暮らしています。西予市内でも、カルスト地形や盆地、段丘、リアス海岸といった起伏が多い複雑な地形があり、1つのまちの中に色々な暮らしがあります。こうした自然や文化の多様性は、地球や生命、そしてここで暮らしてきた私たちの長い歴史の中で育まれてきたものです。
私たちは、これらの多様性を尊重し、平和で豊かな社会をつくる意識を広めていきます。

3 よりよい未来につながる行動を起こす。

現代は、人間の活動が地球の地質や生態系に大きく影響を与えている時代（人新世）と言われ、地球規模の環境問題が暮らしに影を落としています。今求められているのは、自然と共生するために一人ひとりのライフスタイルを見直し、経済や社会の仕組みを変化させることです。
私たちは、世界を持続可能なものにしていくために必要な行動を率先して起こしていきます。

ジオパークとは、地球科学的意義のある場所や景観（例えば特徴のある地層・岩石・地形、火山、貴重な化石、断層が見られるところなど）を保全しながら、教育や持続可能な開発に役立てていこうという考え方によって管理された、ひとまとまりのエリアです。大地の成り立ちを知り、大地が育んだ多様な生態系やそこで暮らす人々の暮らしを丸ごと感じることができる「大地の公園」とも言われます。

BOOK ひろがる本棚

本号の記事に関係する本を紹介します。

『見て・考えて・描く自然探求ノート』（築地書館）

ネイチャージャーナリングを深めるための1冊。観察の方法から、いろいろな対象の描き方まで、豊富な事例と共に紹介されています。観察したことを描く手順がていねいに説明されているので、絵を描くことが苦手な人でも気軽に始めてみることができると思います。

『障害者ってだれのこと？』（平凡社）

中学生が専門家に質問をする、という対話形式のつくりで読み進めやすい本です。障害を個人の身体的な問題としてとらえるのではなく、「ある人が社会で生活する中で感じる様々な障壁」ととらえる視点は大切だと感じました。

図書交流館野村分館
大野さんのおすすめ

『満月をまって』（あすなろ書房）

100年以上前のアメリカが舞台の話。父さんは木や風の声を聞き、かごを編み、満月の日に街へ売りに行く。心無い言葉にも振り回されず、信じて作り続ける。しかし、大地（ジオ）を吹き巡る風は、誰が信頼できるかを知っている。ぼくは風に選ばれ、受け継ぎ、じょうぶで美しいかごを編む。

これらの本は、全て西予市図書交流館で借りられます。

RECS 私のおすすめ

西予市とご縁のある方に、それぞれの目線でおすすめを紹介していただく新コーナーです。

観音水のそうめん流し

西予のおすすめスポットと言えば、観音水！緑に囲まれ夏でもひんやり、滝の音が心地いい。清らかな水の湧く洞窟まで、澄んだ空気をめいっぱい吸いながら散策できます。今住んでいる千葉には近くに山も川もなくて、とっても恋しくなる風景。お楽しみは、この湧き水を使った「そうめん流し」。次々に流れてくる麺をサッとキャッチするのが、ゲームみたいで面白い。つるつるっといくらでも食べられそう！子どもたちと帰省した、あの夏一番の思い出です。

児玉さやか：西予市城川町出身、千葉県在住のスペイン語翻訳者。2児の母。趣味はお菓子作りと、子どもの少年野球チームの応援。

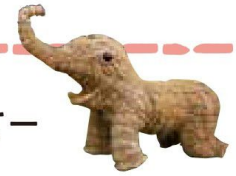
烏殿（からすでん）

宇和在住の方に誘われ、一緒に烏殿（標高588.6m）へ出かけました。松葉城址を通り過ぎてしばらく林道を歩いた後、突然「ここから山に登るよ」と彼女。えっ！冒険の始まりです。ほぼ北に向かって尾根をどんどん登り、少し平らな所であたりを探すと、目標の三角点と「烏殿」と書かれた小さな看板を見つけました。安心しておにぎりを頬張った後、今度は帰り道の目印になる祠（ほこら）を探し、そこから南南東に向かって激下り。林道にたどり着くと、そこには「烏殿登り口」の石柱がありました。何事にも先達はあらまほしきことなり。道なき道を歩く、不思議な経験でした。明日もまた良き友たちと宇和の山を歩いているはずです。

藤岡啓子：宇和島市在住、宇和島山岳会に所属。登山やクライミングが趣味で、週に2日は山に出かけて楽しみたい。

だいちのめ
発行所：四国西予ジオパーク推進協議会　愛媛県西予市城川町下相945番地
企画・取材：加藤雄也、加藤千晴（一般社団法人ノヤマカンパニー）　デザイン：井上真季（ERIMAKI inc.）
http://seiyo-geo.jp

“つくる”を続ける。ー取材を終えてー



ぜひみなさんの感想もお聞かせください。

情報があふれる今の時代、自分らしい生き方をするには、自分なりの軸を持つことが大切で、それはまちづくりにも言えることだと思います。短いサイクルで消費されない唯一無二なものを探究しながら、ていねいに創り上げていくことの、大変さと楽しさを感じる取材でした。

わらマンモスとわらぐろから、暮らしの中の景色で、当たり前にあるものはないということを感じました。誰かに喜んでもらえることを、毎年のことだからと予定に組み込み、楽しみながらやる姿に頭が下がる一方、これから自分たちにできることは何かと考え続けています。

「どろんこのうた」は、書き綴られた言葉の中に“詩”を見出した人がいたことで生まれたものであると知りました。
誰かが発したものをどう受け止めるかによって、そこから生まれる関係性は全く異なり、関係性の集合体が社会を作っています。日々の暮らしの中で、受け止めることを意識したいと思いました。

第7号を読んで

メールフォームを通じて、市外の方から感想を送っていただきました。

・白山ユネスコエコパーク協議会の事務局に勤務しております。以前も回覧で拝見して、面白かったのを覚えています。人の活動や営みが伝わり、その土地の魅力が詰まっていて、感動しました。企画、取材、デザイン、携わっている方すべてに拍手です。これからも楽しみにしています。（40代女性/石川県白山市）

・特集内容が大変美味しそうでした。道の駅へ行きたくなります。宿毛出身なので懐かしさを感じる部分もありました。西予や南予には大人になってからわかる面白さがたくさんあるんじゃないかとわくわくします。（30代女性/高知県高知市）

募集

『だいちのめ』は、四国西予ジオパークの魅力を掘り下げ、未来について考えるフリーマガジンです。
本号へのご感想、今後取り上げてほしいテーマなどのご要望・ご提案、ジオパークについての質問を、ハガキまたはメールでお寄せください。抽選で四国西予ジオパークのちょっと素敵なものをお贈りいたします。
応募締め切りは、2025年7月末。当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。

＜Twitter＞　＜Instagram＞

ぜひSNSでも「#だいちのめ」をつけて
感想や体験談をお寄せください！

① 郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、メールアドレス
② 本誌の入手先
③ 今後取り上げてほしい話題
④ 本号でおもしろかった記事（複数回答可）
⑤ ご感想や、ジオパークについての質問

以上を明記の上、感想入力フォームまたはメールでお送りください。（個人情報は、プレゼントをお届けするためだけに利用し、その目的以外の無断利用は致しません）

宛先はこちら

感想入力フォームはこちら ーーー→

〔メールアドレス〕
✉ daichinome.edit@gmail.com